

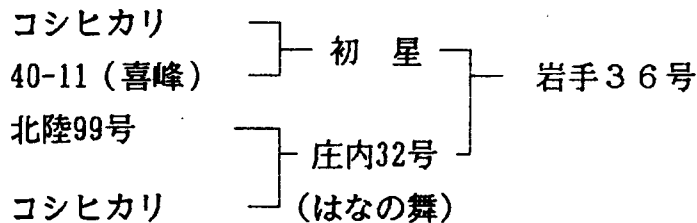
奨 励 品 種
水稲（うるち）「岩手36号」

（農試・県南分場）

1. 来 歴

「岩手36号」は昭和60年に岩手県立農業試験場において、「初星」を母親、「庄内32号」（後の「はなの舞」）を父親として交配、昭和62年～63年に紫波町の現地選抜圃場で選抜後、平成元年から県南分場で選抜を図ってきた系統である。

本県では、平成2年に奨励品種決定予備調査、平成3年からは奨励品種決定本調査ならびに現地調査に供試して、収量及び特性を検討した結果有望と認められた。



2. 特性の概要

- (1) 出穂期は「チヨホナミ」並、成熟期は「あきたこまち」よりやや早い「中生の早」。
- (2) 稈長は「あきたこまち」よりやや短い「中」。穂長は「あきたこまち」よりやや短い「やや短」。穂数は「あきたこまち」より多い「多」。中稈長の偏穂数型品種。
- (3) 耐倒伏性は「あきたこまち」より強く、「チヨホナミ」に近い「中」。
- (4) 収量性は「あきたこまち」並～多収（特に現地）、「チヨホナミ」よりは少収。
- (5) 玄米千粒重は「あきたこまち」より重い。玄米の外観品質は「あきたこまち」並。
- (6) いもち病真性抵抗性遺伝子型はPi-i。葉いもち病・穂いもち病の圃場抵抗性は「チヨホナミ」、「ササニシキ」より強く、「あきたこまち」並の「中」。障害型耐冷性（減数分裂期～出穂期）は「中」。穂発芽性は「トドロキワセ」並の「難」。
- (7) 白米中のタンパク含量は「あきたこまち」より低く、「チヨホナミ」並～やや低、アミロース含量は「あきたこまち」よりやや多いが、「ひとめぼれ」並（いずれも小さい値ほど良食味）。その他の食味関連特性も良好な品種である。
- (8) 食味官能評価は「チヨホナミ」より良好、「あきたこまち」並～良好。

3. 奨励品種に採用する理由

「あきたこまち」は県中南部の平坦地、中南部沿岸地帯に作付けされ、年々その栽培面積が増加するとともに、品質・収量の面で不安定さが指摘されている。一方、「チヨホナミ」は多収性の中生品種であるが、いもち病に弱いこともあり作付けが伸びていない。そのため、岩手県の県中南部平坦地・中南部沿岸地帯に適する中生品種が要望されていた。

「岩手36号」は「あきたこまち」に比べて、登熟性が極めて良好で安定している。また、耐倒伏性がやや強く、収量性は並～多収である。葉・穂いもち病圃場抵抗性は「チヨ

ホナミ」より強い「中」、品質は「あきたこまち」並、食味は「チヨホナミ」にまさり、「あきたこまち」並～良、食味成分も良好な良食味品種である。以上の特性を持つ「岩手36号」を奨励品種とし、本県中南部の中生の作柄安定化と産米の評価向上を図る。

4. 適応地域

北上川中下流及び中南部沿岸地帯の「あきたこまち」及び「チヨホナミ」栽培地帯。(標高100m～200mかつ出穂後40日間の積算気温840°C以上確保可能地帯) 23,000ha。

5. 栽培上の留意点

- (1) 基肥窒素は「チヨホナミ」並とする。「あきたこまち」より耐倒伏性がやや強いが、多肥栽培は倒伏や食味を低下させる原因となるので避ける。追肥の重点は幼穂形成期とし、通常の生育では窒素2kg/10aを基本とする。
- (2) 種子の休眠性が強い為、催芽前の浸種を十分に行う。
- (3) いもち耐病性は「チヨホナミ」に優るが、「あきたこまち」程度のため、「あきたこまち」に準じた適期防除に努める。
- (4) 「あきたこまち」、「チヨホナミ」より登熟速度が早いので、当面は出穂後の平均気温積算で900～1050°Cを目安とし、日照時間や実際の登熟状況を観察して、遅刈りにならないようにする。

6. 試験結果の概要

- (1) 農試県南分場における試験結果(平成2年～4年の奨決調査成績)

系統名・品種名	岩手36号		あきたこまち(標準)	
早 晩 性 草 型	中生の早 偏穂数型		中生の早 偏穂数型	
	標肥	多肥	標肥	多肥
出穂期(月・日)	8.7	8.7	8.6	8.5
成熟期(月・日)	9.17	9.17	9.17	9.18
稈長(cm)	83.0	83.5	83.2	84.1
穂長(cm)	16.6	16.8	17.1	17.5
穂数(本/m ²)	510	542	483	510
耐倒伏性	中		やや弱	
耐冷性	中		やや強	
玄米収量(kg/a)	57.5 *	60.3 *	55.6 *	58.3 *
収量対標準比(%)	103	103	(100)	(100)
玄米千粒重(g)	22.3	21.8	20.8	20.6
玄米品質	上下	中上	上下	中上
食 味	上中		上中	

*: 収量は1.7mmふるい。